

特集

〈事例〉

カフェ&マルシェ、イベントで地域のにぎわいと人の輪をつくる

公益社団法人
米原市シルバー人材センター

(滋賀県)

米原市SCでは、平成29年11月に開店したカフェとマルシェのある「田んぼっ湖カフェ」が7年目を迎えた。地域の誰もが気軽に集えて、自然と人の輪ができる場所づくりを目的に始めた事業である。月1回のペースで多様なイベントも開催。3世代が集い、にぎわいの中心になる。情報発信にも努めて認知度は十分に高まり、利用者にとってもスタッフの会員にとっても心温まる場所となっている。

米原市は、新幹線の通る米原駅や、名神高速道路、北陸自動車道ICなどがある交通の要衝であり、伊吹山や琵琶湖などの自然環境も豊かなところである。

米原市SCは、コロナ禍においても会員数が増加し、粗入会率は5・9%と全国有数の高さを誇る。

「田んぼっ湖カフェ」を運営

センターは平成29年11月、JR坂田駅の目の前に、カフェ（喫茶店）とマルシェ（市場）から成る「田んぼっ湖カフェ」を独自事業でオープンした。地域の人々が気軽に訪れて会員が提供する飲食物を楽しんだり、買い物をしたり、また、会員が栽培した野菜や自作の

手工芸品を販売できる場所である。

翌年6月からは、併設するイベントルームでイベントも開催し、にぎわいはさらに増して、マスコミで報じられる機会も多くなった。全国のセンターや各種団体からの視察・見学が、これまでに30回を超えるほど注目される事業に成長し、令和5年11月、オープンから6周年を迎えた。

高齢者の孤立問題に市と連携して事業化

事業開始当時はセンターの理事長で、現在は「田んぼっ湖カフェ」の代表として尽力している田中大作さんは、事業化の思いと経緯を次のように話す。



右から、北森亘子事務局長、「田んぼっ湖カフェ」の田中大作代表、伊賀並弘彰主幹、運営委員の馬淵佳世子さん、小川洋子さん、「山野草展・メダカ展」を開いた会員の中野吉彦さん（後列）、取材時のスタッフの皆さん（3人）、運営委員の大橋武司さん。見事な看板文字は、交流のある伊吹高校書道部によるもの



自然と会話が弾む心地よい雰囲気のカフェ

「元気な高齢者がセンターで働くことは素晴らしいことです。しかしそれだけではなく、会員同士の交流や地域社会との関わりを深めることで、日々の生活がより充実し、生きがいを持って生きていくことができると思います。このことにセンターとしてどんなことができるのか。この課題を掲げ、検討しました。その中で、高齢者

の孤立が大きな社会問題になっていることに気づき、地域の誰もが集まれる場所づくり、および人の輪づくりとして、カフェとマルシェを計画したのです」

当時、高齢者の孤立の問題に対し、市は自治会単位での居場所づくりを進めており、センターは市の関係部課と協議し、人の交流事業・居場所づくりとして事業化することになった。開店場所は、「米原市近江母の郷コミュニティハウス」に決まった。

事業開始に向けて独自事業推進委員会を設置し、先進センターでの研修、情報収集に励み、それらを基に運営方法を固めると同時に、店舗の改修や調度品の製作などを会員が手掛けた。店舗運営に携わる会員の募集と研修も実施。販売員については、開店から当面はボランティアとしての活動を依頼したところ、39人の会員が協力。毎日3人が交代で当たることとした。センターでは、市長と関係部課

長を交えて毎年ランチミーティングを開催し、「田んぼつ湖カフェ」の活動状況報告や情報交換をしている。この事業には市長も大いに賛同し、期待しているという。

カフェ&マルシェの概要

「田んぼつ湖カフェ」の営業時間は、10〜15時（水曜日は定休日）。スタッフを務める会員は9時30分〜15時30分の間に、午前3人・午後2人で運営を担う。スタッフ会員は現在28人（女性20人、男性8人）。平均年齢73歳、最高年齢は81歳で、毎月シフトを組んで就業している。

1日の仕事は野菜等の入荷受け入れ、カフェの準備に始まり、閉店後は売上伝票整理、後片付けをする。接客やレジの扱いは研修を受け、皆がマスターした。

マルシェには、採れたて野菜やキノコ、山菜、米などが並ぶ。当初から出されている手作りケーキの人气が特に高いという。

出品できるのは会員で、出品するために会員になる人もおり、会員拡大につながっている。出品する会員は、およそ50人。自分の好きな時に出品でき、袋詰めと値付けは各自で行い、販売手数料として売り上げの10%を支払う。

出品者同士で友だちになる会員もいるという。向学心旺盛な会員が多く、家庭菜園の基礎知識講座をJAに依頼して開催し、好評を得ている。

事業運営は、会員7人と担当職員1人の運営委員会が担っている。準備段階から携わってきた会員が多い。毎月委員会を開催してイベントについて話し合うほか、カフェで提供するメニューの開発も行う。だし汁にこだわったうどん・そば、いなりずしなどの人气が高いようだ。

また、出荷された農産品を生かし、その日のスタッフが作るおにぎり、総菜も人気だ。1人分のサイズで味もよく減塩もされている。

マルシェには会員が出品した野菜や米、花、手芸・工芸品、スタッフの手作り総菜が並ぶ



毎月イベントを開催

イベントルームでは、平成30年6月から令和5年9月までに64回のイベントを開催した。随時、市の行政テレビ、地域テレビ、新聞各社に情報を発信することにより、開催がテレビや新聞で報じられ、市内外から来店者が訪れている。

第1回イベントは、会員の中野

吉彦さんによる「山野草展」。大勢が訪れ成功した。以降、月1回のペースで開催を目指し、来店者に楽しんでもらうことを目的としている。イベントは、展示会やミニコンサート、教室などを独自に企画して実施。出展者や協力者は会員、書道や絵画教室の生徒など多様で、地道に活動している人たちに、発表の場を提供している。

令和5年7月開催の「山野草展（第9回）・メダカ展（第6回）」には、3日間で約1000人が訪れ、盛況だった。シニアから孫世代まで集まったという。出展した会員の中野さんは、趣味で山野草や珍しい種類のメダカを育てていて、「田中代表に声を掛けてもらい、田んぼつ湖カフェに出会いました。メダカ展には、小さなお子さんを連れて遠くから来てくれた人もいて、たくさんの人に見てもらって楽しかったです」と笑顔で話す。

イベントや交流事業はほかに、中学生の職場体験の受け入れや、

大学のゼミナール開催、障がい者福祉施設で製造した商品の委託販売など、多世代とさまざまな形で交流を図り、輪を広げている。

「この場所は人生の宝物」

令和4年度の事業実績は、稼働日数308日、来店者数1万1705人、収入（カフェ・マルシェ・その他の合計）は約649万円。年度による大きな変動はなく、

安定して推移しているという。営業時間は日中のため、主な利用者は高齢者で常連も多い。利用者からは次のような声が聞かれている。「堅苦しくなく、とにかく明るい気楽な場所です」「スタッフの皆さんから話し掛けていただき、ついつい話し込んでしまいます」「スピーカーでは、店内での会話はほとんどない。ここではどなたとも気軽に話せる。楽しい」

これらの声には、スタッフの気持ちさが反映されているようだ。運営委員で女性スタッフのリー

ダーを務める馬淵佳世子さんは立ち上げ時から携わってきた。「先進センターに学び、皆で考え、夢を形にした場所です。出会いがあり、友だちができる場です。スタッフとしては、提供した料理に「おいしい」と言ってもらえることがうれしいですし、元気の源であり、私の人生の宝物です。これからも関わってほしいです」と話してく

れた。同じく当初から携わっている副リーダーの小川洋子さんは、「常連のお客さまが多く、ここで自然に交流が生まれています。とてもいい場所だと思います。友だちと来る人もいますが、ここに来れば誰かと話ができるという感じで訪れる人もいます」とこやかにカフェの様子を語る。マルシェの総菜作りも楽しいそうだ。

運営委員で会計を担当する大橋武司さんはシルバー派遣の就労もしながら、「パソコンでマルシェの売り上げ管理などをしていて、頭

令和5年7月開催の「山野草展(第9回)・メダカ展(第6回)」。シニアから幼児まで、3日間で約1000人が来場し大いににぎわった



の体操にもなっていると、思います。スタッフが高齢化してきたので、若い会員に声を掛けて誘いたいと思います」と穏やかな表情だ。

他のスタッフも、「たくさんの人に来ていただき、楽しく1日が過ぎます。なくてはならない私のホットな居場所です」「76歳でウエートレス、充実した1日に満足しています。人生100年、生涯現

役、これからも学んで働いて、笑顔あふれるお店にしたいです」「ここまで山道を越えて来るので雪の日は危ないのですが、若い気持ちになれるのがうれしく、出勤します。時には夫が送迎してくれます。まだまだ頑張ります」など、スタッフにとってもやりがいのある場所になっているとの声がたくさん上がる。

継続していくことが課題

「田んぼつ湖カフェ」は、テレビや新聞などの報道もあり、市内で十分に認知されている。センターの情報発信基地にもなっていて、ここでセンターを知り入会する人もいる。課題は、今後も継続していく体制をつくることだという。

事務局の伊賀並弘彰主幹は、「ボランティア意識が求められるところで、ライフワークとして、田んぼつ湖と付き合ってみませんか、出会いや多世代の人の輪づくりに力を貸していただけませんか、

と呼び掛けてスタッフに誘っています。ほかにはない、なくてはならない場所になっていると思います」と話す。

北森宜子事務局長は、「今後は、県外センターとの交流も広がっていくかと思っています。運営は安全衛生が第一ですが、『三方よし』の精神で、皆が笑顔になれる場として、長く継続していくことを目指し、事務局としてできる限りの手伝いをしていきます」と述べた。

田中代表は、この事業で最も大切になっているのは、「人のつながり」であり、「集まれる場所があること」が大事だと強調した。そして、次のように続けた。

「この6年間、当初掲げた『高齢者の居場所づくりと地域交流』という大きな目標に取り組んでき、会員をはじめ地域の方々の温かい支持を得て、地域に根付くことができました。そして、こうした取り組みが現代社会において大変重要性を持っていると実感して

います。今後もお客さまに楽しんでいただける店の雰囲気づくり、商品開発に努力し、背伸びをせず着実に歩みつつ、地域に役立つセンターのあり方を追求していきたくと考えています」

(増山美智子)

事業運営状況 (平成30年度～令和4年度)

年度	会員数			粗入会率	就業実人員 (延人員)	就業率	受注件数	契約金額	公民比
	男	女	計						
平成30	496	288	784	5.7	743 (80,116)	94.8	2,468	376,514	20.7/79.3
令和元	499	299	798	5.8	738 (79,234)	92.5	2,306	368,152	21.0/79.0
2	486	289	775	5.6	728 (76,418)	93.9	2,292	372,088	22.0/78.0
3	499	306	805	5.8	751 (79,037)	93.3	2,245	381,067	22.2/77.8
4	505	306	811	5.9	760 (88,537)	93.7	2,253	410,336	23.8/76.2

※受注件数、就業実人員、契約金額は請負・委任と労働者派遣事業を合計した数値
 ※就業実人員は請負・委任と労働者派遣事業が対象
 ※就業実人員は令和2年度から労働者派遣事業の教育訓練受講を含む